

第 4 回素材…「葛布」 (開催日：平成 19 年 8 月 19 日)

2007 森と木の家講座レポート

素材を知ろう、  
素材に学ぼう。



「葛布」の織りとその魅力

■講師：大井川葛布工房 (静岡壁紙工業内)

静岡県島田市金谷河原 1747  
TEL/0547-45-4151

- 1/ コースター作りを通して、縦と横の糸を交互に織る原理がよくわかりました。
- 2/ 昔ながらの織り機で織る織元。思わず、見入ってしまいます。
- 3/ 葛布と絹で織ったスカーフは、柔らかくて美しく…とても素敵でした。
- 4/ 葛の蔓をわらの中で発酵させて、皮をむきます。天然の納豆菌が働くので、「ちょっと納豆くさ〜い」。
- 5/ 皮をむき、乾した葛の蔓を持つ親方。これを糸状に割いて、織っていくのです。

葛布(くずぶ、"かつぶ")と音読みもするそうです)のことは高級襪の素材として知ってはいましたが、どこが優れているのか、どれほどの魅力があるのか正直知りませんでした。今回「大井川葛布」織元の村井氏と奥様にお世話になって機織、織物、染めの基礎的なお話から葛布織りの超初心者体験バージョンまで4時間ほどの講座を受けさせていただきました。村井氏の講話は、はたおり(機織)の話から始まりました。7月7日の「七夕」の語源は「棚機(たなばた)」という織機の一つの形式名から由来し、また織姫(おりひめ)というのは機を織る女性のことなんだそうです。静岡市の地名に羽鳥(はとり)はたおり、富厚里(ふこうり)はふくおり、麻機(あさはた)など機織に関係のあるものが沢山あることなど、昔は機織が人々の生活の上で大きな部分を占めていたことがよく分かりました。更に織物全般の話に進んで、麻やリネン(亜麻)・葛布などの植物繊維の布地は、吸湿性・通気性などの優れた性能をもち、人の身体に優しい素材であることを教えていただきました。布を染める染色についても、植物染料を使用していた時代のもは、単に色彩だけでなく染料の成分に抗菌、脱臭、防虫効果などがあり、身体を包むだけでなく、そのような形で身体を守っていたことに驚きました。そして、これらの優れた織物とその性能が、合成繊維や化学染料の出現によって忘れ去られていたことも知りませんでした。安くて丈夫な合成繊維と色を自由に使いこなせる化学染料に対して、時代遅れと思っていた昔からの布にそんな優れた性能があったとは驚きです。

講義が進むにしたがって、織物の世界に、住宅建築が抱えている現状の問題点との共通性が明確に見えてきました。便利さや、手軽さ、経済性を追求する中で置き去りになっていた、安全性や優しさ、素材の魅力などです。人の生活に不可欠なものは「衣・食・住」ですから、この共通性は当然のことかもしれませんが、織物や食品の世界に学ぶことが沢山あります。



糸巻する女性たち… (手前が親方の奥さん)

さて、肝心の葛布ですが、耐久性が優れていること・光沢が美しいことが特徴で、年を経てもそれが褪せることなくむしろ味わいをまして落着いた表情になってゆくのだそうです。歴史は古く数千年を遡ることですが、近代においてもその光沢の美しさから高級壁装材として欧米でも人気があり、かなり輸出されていたそうです。なんとホワイトハウスやバッキンガム宮殿に、そして日本では最近、日本民芸館にこの大井川葛布が使われたとのこと。

葛布の糸は、まず蔓を蒸し、発酵させ、水に晒して茶色っぽい表皮の下にある内側の薄い皮を取り出し、それを細かく裂きます。これを、撚りを掛けないで平らな糸の状態使います。独特の光沢は、この撚りを掛けない糸の輝きです。また、長さがまちまちの糸を縛って繋ぎ合わせ、長い一本の糸にする葛布は、結び目が織り上がり独特の表情を出します。

織り方は、横糸を葛で、縦糸は絹糸や綿・麻の糸で織ります。織り機は昔ながらの機織り機でした。織り方も、糸の製法も、現代の自動化された機械では出来ないものだと思います。縦糸に使う絹糸や綿糸も、今のものには問題点があるので産地や製法を調べて研究されていると、奥さんがおっしゃっていました。歴史のある古いものをつかりと見直して、優れた性能や伝統技術を再び現代に取り戻すこと…。それが大井川葛布さんが取り組んでいる活動だと思いました。これは、正に木造建築の世界にも共通の課題で、大変参考になりました。

(文)コラボ 新井 真